

女性財産犯の人生の語りの分析

藤野京子

1. 女性犯罪者と一般女性の自己申告結果の比較

犯罪に走る者と走らない者の自己像の差異を明らかにするため、犯罪者群としては、2015年7月から2017年7月に更生保護法人⁽¹⁾に在所し、調査協力に応じた計30名の女性犯罪者（平均49.8歳。主に財産犯、一部他罪種を含む）に質問紙を配布して回答してもらった。一方、非犯罪者群としては、2017年7月に25～34歳、35～44歳、45～54歳、55～64歳、65～75歳の各層100名、計500名の一般女性に、インターネットを通じて調査を行った。

調査では、EPSI（エリクソン心理社会的段階目録検査：Erikson psychosocial stage inventory）（中西・佐方 2001）を測定した。周知のとおり Erikson は、ライフサイクルの中で経験する危機を乗り越えて基本的力強さ（人格的活力）を身につけ、より健全な自我発達を目指すとして、その過程を、自我と社会との関係を中心に8つの心理社会的発達段階として理論化している（Erikson, 1959）。EPSI は、この Erikson によって定式化された自我の発達段階図式に対応した心理社会的発達課題の達成感覚を、個人がどのくらい意識しているかを測定評価するものである。具体的には、信頼性（他者を含めた周りの世界に対する信頼感、および自己への信頼感）、自律性（自らが自由に選択し決断できるという有能感をもち、自分に対して疑惑や恥を感じていないこと）、自主性（自発的かつ意欲的にものごとに取り組み、自分がよいと思う行動に責任を持つとする心構え）、勤勉性（目標を実現するために自分の技能を発揮することによる、自尊感情を伴った効力感）、同一性（自分という存在を明確に理解し、人生をどう生きたいかをしっかりつかんでいる感覚）、親密性（自分を見失うことなく、他者と親密な付き合いができ、孤独感を感じないでいられる状態）、生殖性（次の世代を世話し育成することに対する関心と、そのことにエネルギーを注いでいるという自信）、統合性（自分の人生を自らの責任として受け入れていくことができ、死に対して安定した態度をもっていること）、の8尺度で構成されている。これら8つの発達課題の達成感の多少は、成人における適応感に関係していることから、非犯罪者に比べて犯罪者の方が少ないかどうかを検討することにした⁽²⁾。

EPSI の下位尺度として信頼性を測定してはいるものの、より詳しく信頼感を明らかにするため、天貝（1997）の成人版信頼感尺度も測定した。これは、自己信頼、他者信頼、不信、を測定する

ものである。また、Gottfredson & Hirschi (1990) 以来、セルフ・コントロールが十分でないことが、犯罪に走らせる要因であるとする研究が多いが、セルフ・コントロールのどの側面が犯罪に走らせることに関与しているかを明らかにすることも有意義である。そこで、杉若 (1995) の習慣的な行動を新しくより望ましい行動へと変容していくための改良型セルフ・コントロール、ストレス場面で発生する情動的・認知的反応を制御する調整型セルフ・コントロールの2尺度も測定した。さらに、犯罪者に限らずとも、人は人生で幾多の苦境等に出合うのであって、犯罪者と非犯罪者はその現状を受け入れる力に差がある可能性もある。その点を確認するため、アクセプタンス (体験を回避せず、受け入れる傾向) を測定する木下・山本・嶋田 (2008) の Acceptance and Action Questionnaire-II (AAQ-II) も使用した⁽³⁾。

また、ストレス状況下での対処方略として、TAC-24 (神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995) も測定した。Agnew (2005) のストレイン理論では、ストレス下の緊張状態が犯罪に走らせると主張しているが、ストレス状況下での対処方略が異なる可能性もある。TAC-24は、日々の生活で出合うストレスへの対処方略として、肯定的解釈、カタルシス、回避的思考、気晴らし、計画立案、情報収集、放棄・諦め、責任転嫁を測定するものである。

このほか、何を基準として行動選択するかが犯罪者と非犯罪者で異なることも考えられる。菅原・永房・佐々木・藤澤・薊 (2006) は、①自分、②身近な他者、③いわゆる世間、④本人が直接接触れるとは限らないものの公共的視点、のどの範囲まで考えて、行動を選択しているかといった視点から検討している。非犯罪者に比べて犯罪者は、公共的視点をはじめ他者の視点を顧みず、自身の視点でのみ行動しがちで、犯罪とは、まさにその帰結であるとも考えられる。そこで、自身の行動が上記①～④のそれぞれに及ぼす影響をどの程度考慮するか、また、①～④による自身に対する評価をどの程度考慮するか、という行動基準を5件法で測定した。

一般女性と女性犯罪者の2群の測定結果は、Table 1のとおりである。EPSIの下位尺度のうち、信頼性、自主性、統合性において有意差が見られる。それぞれの発達課題に直面する中で、それ以前に獲得したと思われるものも揺らぐ可能性はあるが、調査時点の状態として、犯罪者の方が信頼性がなく、自主性に乏しく、統合性に欠いているという結果である。また、成人版信頼感尺度の結果からは、自己信頼、不信に有意差が見られた。犯罪者の方が自己を信じられず、不信の念が高い、という結果である。

また、アクセプタンスについて、犯罪者の方が得点が低く、体験を回避して受け入れない傾向を有するとの結果が得られた。

一方、今回測定したセルフ・コントロールでは、有意差は見られず、自認するレベルにおいては、違いがあるとはいえない結果であった。また、TAC-24で測定したストレス下の対処方略についても、有意差が見られなかった。このほか、行動基準については、想定した結果とは違って、一般女性よりも女性犯罪者の方が、自分への影響を考えないという結果が得られた⁽⁴⁾。

女性財産犯の人生の語りの分析

Table 1 一般女性と女性犯罪者の各尺度における平均及び標準偏差

尺度	一般女性		女性犯罪者		効果量 <i>d</i>	<i>t</i> 値	尺度	一般女性		女性犯罪者		効果量 <i>d</i>	<i>t</i> 値
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>				<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		
EPSI													
信頼性	20.78	(3.94)	18.34	(4.30)	.61	3.21***	肯定的解釈	9.73	(2.30)	9.41	(2.37)	.14	.71
自律性	22.47	(4.07)	20.97	(4.37)	.37	1.93	カタルシス	9.44	(2.46)	9.28	(2.76)	.07	.36
自主性	21.12	(3.70)	19.22	(4.48)	.51	2.70**	回避的思考	8.58	(2.10)	8.76	(2.37)	-.08	-.44
勤勉性	22.32	(4.02)	21.57	(3.39)	.19	.96	気晴らし	8.28	(2.29)	8.88	(2.98)	-.26	-1.07
同一性	22.65	(3.99)	21.37	(4.30)	.32	1.71	計画立案	9.53	(2.17)	9.28	(2.70)	.12	.61
親密性	21.40	(3.86)	20.97	(4.75)	.11	.59	情報収集	8.85	(2.23)	8.72	(2.34)	.06	.29
生殖性	19.51	(4.05)	18.53	(4.58)	.24	1.27	放棄諦め	7.99	(2.14)	8.07	(2.42)	-.04	-.18
統合性	21.72	(3.97)	19.63	(4.02)	.52	2.79**	責任転嫁	6.36	(2.11)	6.19	(2.57)	.08	.41
合計	171.97	(25.67)	159.02	(24.23)	.51	2.56*							
成人版信頼感													
自己信頼	19.64	(4.19)	17.76	(3.37)	.45	2.21*	自分影響	3.43	(.88)	2.96	(.96)	.53	2.64**
他者信頼	22.75	(4.96)	22.38	(4.76)	.71	.37	身近影響	3.33	(.94)	3.24	(.95)	.09	.48
不信	25.97	(5.56)	29.26	(6.14)	-.59	-2.87**	世間影響	2.86	(.90)	2.93	(1.13)	-.08	-.42
セルフ・コントロール													
改良型	30.53	(5.37)	31.14	(4.66)	-.12	-.56	社会影響	2.62	(.92)	2.41	(1.05)	.22	1.17
調整型	18.45	(3.74)	19.60	(3.44)	-.31	-1.50	自分評価	3.33	(.80)	3.24	(.95)	.11	.57
アクセプト	36.61	(6.87)	31.68	(6.32)	.72	3.52***	身近評価	3.28	(.89)	3.31	(1.04)	-.04	-.19
タンス							世間評価	2.92	(.91)	3.24	(.95)	-.35	-1.84
							社会評価	2.85	(.88)	2.93	(1.03)	-.09	-.46

p*<.05, *p*<.01, ****p*<.001

2. 犯罪者へのライフストーリー・インタビュー

上で示されたように、一般女性に比べて女性犯罪者は、信頼感に乏しく、自らの人生を自身の責任として受け入れていく統合性等が十分でないという特徴があるわけだが、本人は自身をどのようにとらえているのであろうか。その詳細を明らかにするため、女性犯罪者には、先の質問紙調査に加えて、インタビューを行った。

語りには、何が起きたかという出来事に対する描写、また、その時、何を感じたかや、今、何を感じているかというその出来事に対する主観的・感情的・経験的描写、さらに、振り返って、それにはどんな意味があったのかという内省や解釈が含まれたりする。語られる事実もさることながら、それらを自らの人生にどのように枠づけるかが、注目のしどころである。語りは、能動的な情報処理構造、認知的スキーマ、あるいは概念の体系として理解できる。すなわち、当事者が自身をどのように理解して、なぜあることをしたかを説明するために構築した物語なのである。言語化する過程で、経験した出来事の意味を見出すなど過去を省察・解釈し、再体系化していくようで、ナラティブ・セラピーの提唱者 Epston, White, & Murray (1992) は、こうして語られたものを、「自分の経験を枠づける意味のまとまり」としている。

Maruna (2001) は、犯罪から離脱している元犯罪者と、犯罪を続けている犯罪者の思考パターンや個人的信念を比較する目的で、McAdams のライフストーリー・インタビューの修正版を用いた研究を行い、元犯罪者が立ち直りやその状況を維持する手助けとなりうる認知的適応と自己

スキーマを特定しようと試みている。

Maruna (2001) も言及しているとおり、この自己物語とは、新しい経験と情報に照らし合わせて、内省的活動を通じて再構築されるもので、人生を通じて変わっていく。しかしその一方、人は自分自身について創り出した物語や神話に沿って行動するのであって、犯罪もその一形態である。

今回、収集したデータは犯罪に走った結果、更生保護法人に在所している者であって、今後、犯罪から離脱していくか、それとも犯罪を続けていくかは、定かでない。ただし、同法人を出て以降は自立生活を送ることになるのであって、この状態にいる彼らが、どのように自身をとらえているかの主観を明らかにすることは、元犯罪者などの比較群がなくとも有益であろう。

ライフストーリー・インタビューの手法は、Maruna に倣い、McAdams (2008) に基づいて半構造化面接で行った⁽⁵⁾。具体的には、A. 人生をいくつかの章立てとした小説にするとして、各章の簡単な内容、B. 人生における大切な場面 (①頂上経験、②底辺経験、③転機、③子ども時代の肯定的記憶、④子ども時代の否定的記憶、⑤大人になって以降の鮮明な記憶、⑥賢く振る舞えた出来事、⑦宗教的、スピリチュアルな、神秘的な体験)、C. 将来の筋書き (①上記 A の小説の次章、②未来に対する夢、希望、計画、③今後の人生での志)、D. 難題 (①人生で最も挑戦したこと、②健康の問題、③喪失体験、④失敗や後悔したこと)、E. 個人的信条 (①宗教的・民族的価値観、②政治的・社会的価値観、③宗教や政治的見解についての変容、④人間が生きていく上で最も大切な価値観、⑤その他)、F. 人生のテーマ、を聴取した。

3. 女性財産犯の語りからの分析

女性犯罪者は、一般女性に比べて信頼感に乏しく、自らの人生を自身の責任として受け入れていく統合性等が十分でない傾向が上記調査結果で得られたことから、その傾向が顕著である3名について、McAdams のライフストーリー・インタビュー手法で明らかにされたことを以下で紹介する。加えて、犯罪の内容を紹介し、質問紙調査の結果や他の資料とあわせて考察していく。

各人の質問紙調査で得られた得点は、Table 2のとおりである。なお、女性犯罪者には、Walters (2013) が犯罪者の特徴として提示した8つの思考スタイル (責任の緩和、遮断、権利付与、力志向、感傷性、超楽観主義、認知的怠惰、継続性のなさ) について、各々1項目⁽⁶⁾「まったく当てはまらない」～「非常によく当てはまる」までの5件法での回答も求めたので、あわせてその結果も示す。

3-1 事例A：親が亡くなって以降、生活が立ち行かなくなった女性 (50歳)

【事件の概要】 自宅で使用するためにガスボンベを万引きして、受刑に至っている。自宅に住み若干の貯金もあるので生活保護受給対象にはならないが、不就労で全く収入の目途がない状況

女性財産犯の人生の語りの分析

Table 2 事例 A～C の各尺度の測定結果

	A	B	C		A	B	C		A	B	C		A	B	C				
EPSI				成人版信頼感				TAC-24				行動基準				思考スタイル			
信頼性	10	11	13	自己信頼	7	20	14	肯定的解釈	6	9	10	自分影響	3	4	3	責任の緩和	3	2	2
自律性	10	19	14	他者信頼	16	19	15	カタルシス	5	9	10	身近影響	4	4	3	遮断	3	4	4
自主性	14	15	22	不信	32	44	26	回避的思考	7	7	7	世間影響	3	4	2	権利付与	1	1	1
勤勉性	14	23	22	セルフ・コントロール				気晴らし	3	6	11	社会影響	1	4	1	力志向	1	1	2
同一性	10	23	22	改良型	30	38	26	計画立案	10	12	10	自分評価	1	4	3	感傷性	1	3	3
親密性	10	12	20	調整型	13	18	24	情報収集	10	10	7	身近評価	4	4	1	超楽観主義	1	4	3
生殖性	14	8	19	アクセプタンス	20	25	36	放棄諦め	9	11	12	世間評価	2	4	5	認知的怠惰	1	2	4
統合性	15	14	16					責任転嫁	3	8	4	社会評価	3	4	2	継続性のなさ	5	3	4

下、事件を起こしている。今回で2回目の受刑になるが、前回、刑務所を出てから11ヶ月で再犯に至っている。前刑も、同様の状況での窃盗である。

前回、刑務所を仮釈放されてから、残刑期期間を更生保護法人で過ごし、その後、地域包括支援センターの支援を受ける段取りになっていた。しかし、斡旋された施設での生活が監禁まがいだったとして、そこを逃げ出している。この件を警察に通報したところ、本人がおかしいのではないかとみなされたと語っている。やむなく自宅に戻ると、差し押さえの張り紙が自宅に貼られており、そこで生活するのが怖くなったとして、車中で生活したりもしていた。この間、首を吊ったり、大量服薬をしたりと、2度自殺を図ってもいる。

【語られたライフストーリー】 これまでの人生について、「捕まる前」と「刑務所に入ってから」に2分割している。捕まる前は、家族がおり、孤独でなかった一方、刑務所に入ってから、一人になって寂しい、と語る。人生での頂上経験には、20代前半、自宅の庭で、両親、兄の家族、姉の家族、ペットとバーベキューをしていたころを挙げ、家族が集い、楽しかったと振り返る。

子ども時代の否定的記憶には、中学生のとき、病気で学校を欠席したところ、男子生徒に取り囲まれ、怖い思いをし、結局、不登校になってしまったことを挙げている。一方、子ども時代の肯定的記憶には、高校時代を挙げ、勉強も楽しかったし、実習など新しい体験もあって充実しており、卒業するまでは友達もいた、と振り返る。また、賢く振る舞えたこととして、高校時代、朝早く起きて、テストに向けて勉強して、良い成績を得ていたとも語る。

一方、人生での底辺経験としては、母親の死後の45歳ころ、兄から自宅で暴力を振るわれたことを挙げている。暴力を振るわれたとき、兄と2人だけで、「怖い」としか考えられなかった、としている。そして、このことが、自身が犯行に至り刑務所に入ることにつながったとして、この件が、人生の転機である、ととらえている。さらに、大人になって以降の鮮明な記憶としては、事件の概要の箇所で触れた監禁まがいのことをされたことを挙げている。

高卒後、一旦は就職したものの、1週間程度でやめている。基本的には、実家の家事手伝いが中心で、母が就労先から持ち返った内職を細々としていた程度である。また、幼いころから病弱で、大人になって以降、入退院を繰り返してもいる。

これまでの健康の問題では、気づくと母が末期ガンになっていたことを挙げ、元々母も病弱であって、病弱同士で面倒を見合って、仲が良かったと語る。兄弟には婚姻家族がいることもあるが、自分だけは両親思いであったと強調する。そして、喪失体験には、母の逝去を挙げている。その前に父も逝去しており、父の逝去にも十分対処できていたわけではないが、父の逝去後、自身、飼い犬、母が病気になったりと忙しく、ある程度気が紛れてもいたが、母が亡くなったことには、全くどうしてよいのかわからないと語る。大好きなお父さんお母さんが生きていれば、2度も刑務所に入っていない、2人がいなくなってしまうと、自分はどうしようもなくなってしまう、本当に会いたい、と嘆く。

最も後悔したこととして、自身の犯罪を挙げている。犯罪したことで、人生が終わっちゃったと思ったとし、1回やってしまったので、もう取返しはつかない、戻りたくても戻れないので、もうどうでもいいって感じになっている、と説明する。消せないのも、挽回とかは無理、と言い切っている。そして、自身の優柔不断な性格が災いしている、と語る。高校時代に意欲的に生活していたことについても、「やれっ」という外からの枠組にがっかりはまった感じに過ぎない、と否定的見解を述べる。親が生きていれば、自身の失敗の汚名を挽回するべく頑張ろうと思えるかもしれないけれど、親は天国におり、犯罪をした自分は天国には行けないので、二度と会えないと断言する。そして、このような辛い気持ちが日に日に増し、気力も失せてきている、としている。

今後の展望について、全くわからない、今日どうするかもわからない、と語る。前回刑務所を出てからのことを、さまよってしまい、とにかく苦しかった、今はとりあえず屋根のあるところに居られるのでほっとしている、と語っている。

【ライフストーリー以外で得られた本人情報及び本人の特徴】 会社勤めの両親の次女として生誕。姉や兄とは少し年が離れており、一人っ子のように育てられたとしている。また、ライフストーリーの中でも語られているように、兄のことを心底恐れている。兄は、本人の実家の金の使い方を問題視しているようで、母の生前から、その件で本人に暴力を振るうようになったとしている。兄は働きながら大学を卒業しており、転職歴もない。しかし、自己中で、神経質で、気に入らないことがあるとキレるような人で、かつ、酒癖も悪いと、Aは描写する。兄と姉は、親の遺産相続をめぐる、グルになっていると説明し、疎遠である。

父の他界後、40歳くらいのころ、Aはうつと正式に診断されたとするが、それ以前からメンタルケアを受けていたとのことである。また、ライフストーリーで語られた不登校以前、すなわち、小学校のころ、児童相談所に係属したことがあるらしく、そこで、発達障害かもしれないと言われたらしい、と兄から近年聞かされたとも述べている。実際、自閉症スペクトラム尺度（若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004）では、カットオフ得点を越えており、特に、社会的スキル、コミュニケーション、注意切り替えの問題が顕著であるとの結果が得られている。

女性財産犯の人生の語りの分析

Table 2のとおり、EPSI の得点は信頼性、統合性に限らず、いずれも低い。成人版信頼感の結果からは、全般に信頼感が乏しく、自己信頼の低さが際立っている。改良型セルフ・コントロール、TAC-24のうち計画立案や情報収集の得点は平均並みで、行動開始前には情報を収集して取捨選択して物事に取り組もうとするものの、調整型セルフ・コントロールの得点が示すように、失敗しても気力を失わずに取り組み続けることができない様子である。思考スタイルの得点からも、継続性のなさを自認していることが見て取れる。また、ライフストーリーからは悲観的な語り前面に出ているが、TAC-24の結果からも、肯定的解釈をせず、カタルシスや気晴らしを試みることもなく、放棄・諦めの傾向を有していることがうかがえる。

これまで記したような自己像を有しているため、人に責められると太刀打ちできないとして、動じてしまうだけである。そうした事態に遭うまいと逃げ腰になるだけで、事態打開に向けて建設的に取り組む忍耐力や気力は乏しい。自身の心もとなさを誰かに支えてほしいという依存の強さを有しているものの、対人スキルが乏しいこともあって、助力も得られにくい。

親の生存中は、上記問題が露呈しなかったものの、親の逝去により、その庇護が得られなくなってからは、たちまち生活が立ち行かなくなり、犯罪を繰り返す事態に陥っている。高卒後、親が自立に向けての働きかけをせず、親に依存した状況を甘受してきた点を問題視することもできようが、本人の資質を踏まえた上での、親なりの配慮であったことも十分に推察できる。しかし、それが兄弟には甘やかしと映り、両親他界以降のもめ事の導火線になってしまったと解釈できよう。あるいは、兄弟は親ほどまでには本人を庇護する余力がなく、その中で、次々に問題を起こしていく本人に辟易してしまったのかもしれない。

ライフストーリーで語られるように、A 自身、この状況を良しとみなしているわけではない。アクセプタンス指標からは、この現状を受け入れたくない、認めまいとの心情を有していることが見て取れる。しかし、自身は無力であり、いかんともしがたいととらえている。

今後の就労について、自身が病弱で薬に慣れ親しんできたので、調剤薬局の事務の資格を取って働きたいと述べたり、一人の生活は寂しく、話相手がほしいので結婚したいなどと述べたりする。これらは、先にも触れたように、TAC-24のうち計画立案ができることを示しているであろう。しかし、その就労に向けて準備する気配はないし、結婚に関しても、思い描いた相手は初恋の人である、と語っており、これまで交際した人もおらず、その具現化可能性は低いと言わざるをえない。

40代になって始めて犯罪に手を染め始めたケースである。しかし、人的支援が得られないままでの自立を促すならば、たちまちのうちに生活に行き詰まり、再犯することは目に見えている。本人の特性を考慮して、本人にとって苦と感じずに済む環境を提供し、その中で心的交流を図り、少しずつエンパワメントしていくことが効果的な処遇となろう。

3-2 事例B：過食のために万引きを繰り返した女性（47歳）

【事件の概要】 食品の万引きを20歳代後半から続けている。過食になってしまい、食べたくて仕方がなく、食費が底をつき始めたある日、1個盗ったら成功したとし、次は2個、3個とエスカレートしていったと振り返る。昼ごろに店に行くと、焼きたてのパンの香りがたまらなく誘惑してくる、と語る。食べたい気持ちは抑えられず、お金があるときは買う（出来合いのもの、インスタント食品を含め、1度に3～4000円程度かかる）ものの、なくなると万引きになる。

うつ、摂食障害、不眠の症状を呈し、30歳代前半から精神障害者認定をされている。それを逆手に取り、万引きで捕まっても、障害者手帳を見せると、警察で大目に見てくれ、親が引き取りに来てくれて、それで終わりと思っていた、と振り返る。

受刑は今回が初めてである。しかし、前回捕まった際に、執行猶予判決が下っている。その裁判の担当弁護士の口利きで、クレプトマニア治療の専門病院に入院したものの、すぐにその病院を無断退去してしまっている。その後、間もなく再犯が発覚し、今回の受刑に至っている。親が無断退去したことでカンカンに怒って、それがさらにストレスになって、問題が悪化してしまった、と説明している。

【語られたライフストーリー】 これまでの人生を7章に分けて語っている。第1章は、自身が生まれた頃のことを取り上げている。両親が10歳違いで、父が若干年をとってからの初めての子だったこともあって、すごく可愛がられて育てられたとして、新調した服を着た写真も一杯残っていると述べている。

第2章は、友達もいなかった小中学生時代と題して、語る。教師である親に「勉強しろ」と毎日言われ、くだらないテレビは見てはいけないなどの制限をかけられ、その結果、友達とのテレビの話題についていけず、無口になっていき、友達もいず、運動などのグループ活動が憂鬱であったこと、2つ下の妹も同様だったようで、いつも妹と2人で一緒にいたこと、を語る。

第3章は、親が希望した女子高に入ったものの、成績が悪くて暗かった高校時代と題して、語る。以前よりも、気持ちが暗くなっていったと説明する。代々教員をしてきた家庭で、Bも子どものころから、教員になれと言われて育ったと振り返る。塾に通い、家庭教師もつけられて、地元では一番レベルの高い高校にどうにか入ったものの、自分なりに頑張っても、成績はいつも下位であったと明かす。高校になって以降は、テレビ視聴を制限されなくなったにもかかわらず、人の輪に入っていけず、どうして自分は友達がいなのだろうと暗くなっていったと説明する。それに引き換え、妹の方は、高校に入って以降の成績も優秀で、みるみるうちに明るくなって友達も増えて、自分と遊んでくれる時間がなくなっていき、自分とのギャップを感じたとしている。それ以前は、学校に友達がいなくても、家に帰れば妹と一緒にいられたし、長期休暇の時に行く家族旅行も楽しみにしていて、親をさほど嫌いと思ったことはなかったと回顧する。一方、このころになると、家族に可愛がられていると思いつつも、頭も悪いし、要領も悪いし、何をやって

もだめだなあ、だめな人間だなあ、家族はやっぱり妹の方が好きなのかなと思うようになり、妹と差別されているような気が常にするようになっていったと振り返る。ちなみに、子ども時代の肯定的記憶としては、この夏休みの家族旅行を想起しており、一方、否定的記憶としては、妹に成績などを比べられたことを挙げている。

第4章は、短大デビューと題して、地元を離れて私立の短大に推薦入学したことを語る。当初は、両親も国立大学の教育学部を目指せと言っていたものの、卒業のころには、教員は無理だろみたいな感じで、その短大では栄養士の資格も取れるからと納得して、進学したとのことである。親元を離れて生活してみると、説教されなくなってせいせいしたと思ったのは束の間。寂しいと感じるようになり、なんだかんだ言って、親のことが好きだったんだと自覚したとしている。短大時代は、多少友人もできたとし、人生における頂上経験として、この親元を離れ一人暮らしをして、当初の親の希望とは違うものの、資格を取ることができたことを挙げている。

第5章は、就職し、結婚に至った内容を取り上げている。大手企業に就職できたものの、親は、「お前なりにがんばった」程度の評価にとどまったと語る。一方、妹は親の希望どおり国立大学を卒業し、小学校教員になったと付け加える。就職先の仕事がきつく、転職に至り、その職場の取引先の8歳年上の人と1年くらい交際し、25歳で結婚したと説明する。両親は、この結婚に際して、公務員でなく安泰でないと乗り気でなかった様子だが、自分が頼み込んでしぶしぶ承諾を得た、と回顧する。

第6章は、DVを紛らわすため、過食が始まったとの内容である。結婚して、半年くらい経過したころから、夫の朝帰りが始まる。朝帰りの理由が自分に問題あるかと思って、理由を聞くと、「お前には関係ないだろ」「うるさいなあ」という言葉の暴力が始まり、エスカレートして、殴る蹴るの暴力を受けるようになっていったと語る。結果、肋骨が折れたこともあったが、医者には転んだと説明したと言う。親に反対されて結婚したので、親になど相談できない。妹に対しても、恥ずかしいことなので言えないし、言えば、家族につつぬけになると思ったとして、言っていない。

そのころ、過食が始まっている。テレビを視ながら食べているときだけは、そのような生活の辛さを忘れていると気づいたとして、過食するようになっていったと語る。そして、人生における底辺経験として、このDV被害を挙げ、結果、過食になり、食費代が足りなくなると万引きをするようになり、人生が狂ってしまった、ととらえている。

子どもができれば、夫も変わるかもしれないと思い、子どもを産んでいる。しかし、妊娠期間中も、夫の言動は変わらず、切迫流産をしそうになって、3か月入院して、無事出産に至っている。入院中はDVされる危険がなくほっとできた、とその心情を明かす。両親は「あんたは細かいから、大事にしなさい」と心配してはくれたが、DVには気づけなかったと言う。なお、入院をすることになって、離職に至り、以来、今日まで就労していない。

大人になって以降の鮮明な記憶として、この出産を取り上げている。切迫流産で入院したこともあって、ちゃんと産まれてくるかどうか心配で、「五体満足に生まれた」と言われたときは、本当に嬉しくて、これで旦那も変わってくれればいいな、これから人生変わってくれればいいなと思って、すごい嬉しかったのをハッキリ覚えている、と語る。

しかし、夫は、子どものことはかわいがるものの、自分への暴力は変わらず、過食が続いている。出産中は太って仕方がないものの、出産後も太っていると、余計に夫に嫌われると気にして、過食嘔吐が始まっている。結局、夫の暴力に耐えかねて、1歳前後の子どもを連れて、実家に逃げ帰っている。実家に戻って以降、子どもが幼稚園に入るころまでは、両親、本人、子どもの4人で暮らしている。しかし、実家で肩身が狭いと感じ、さらに、夜になるとどうしてもDVが思い出され、過食が止まらず、この時期、リストカットもしている。そして、このような状態を見せることは、子どもに良くないからと実家に判断され、本人は実家から離れたところで暮らすに至っている。

夫との離婚に際して、親権が争われ、結果、自分に精神疾患があり、就労していないことを理由に、親権が夫に行ってしまったと口惜しそうに語る。そして、人生の転機として、この親権を奪われたことを挙げている。親権をもっていたならば、働こうなど、人生にやる気が出たかもしれないと口にする。実際には、本人の両親が全面的に子育てを行っているが、子育てに自分を加わらせてもらえなかったと訴え、子どもも自分になついていない、と寂しげに語る。

最終章の第7章は、毎日過食し、食品代がエスカレートし、月末になるとお金が足りなくなり、万引きをするようになって、結局、刑務所に行くことになった、としている。人生における最大の後悔として、犯罪をして刑務所に入ったことを取り上げ、「〇家で刑務所に入ったのはあなただけ」と言われ、「そこまで落ちぶれたか」と受け止めている。また、過食嘔吐については、栄養士になるべく大学で学んだ知識を悪用してしまっているとも付け加え、食べたい気持ちに勝てない自分が恥ずかしい、としている。

自分の万引きについて、自分に宿る神秘的な体験ととらえている。そんなことをやるような自分でなかったのに、なんでこんな自分になったのだろう、金銭を扱う職務経験があって、お金の大切さを知っているのに、なぜこのようなことをしてしまうのであろう、自分は二重人格なのかなと思ったりもする、と語る。万引きをしてしまった後、死にたいと思う。そう思うくらいならば、やめればいいと思うのだけれども、やめられないと、その内実を語る。盗癖という病気だからということで済まされるわけではないと知っているものの、やめられないとして、そうした自分に辟易している。逮捕直前にも、電車で飛び込もうと思って、踏み切りのところまで行ったものの、足がすくんでしまったとし、自殺者の話を聞くと、すごいと思うとし、自分は自殺をする勇気も万引きをやめる勇気もなく、いったいどうしたらいいんだ、と自分を持って余している。

なお、小学校のころから自分は弱い人間で、親は厳しいけれど、何かしても助けてくれると心

の片隅で思っていた、しかし、受刑することになって、親にいつも助けてもらえるとは限らない現実に直面して、自分が甘かったことに気づいたとしている。なお、刑務所生活では、ストレスの発散方法として、過食以外にも読書や筆記が有効であると学んだとし、信頼関係を取り戻すべく親孝行もしたい、と口にはしている。

【ライフストーリー以外で得られた本人情報及び本人の特徴】 Bなりに努力しても、それほど学力が伸びなかったとのエピソードに関して、知能検査の結果からは、若干の知的制約が影響していることが推察できる。

インタビュー当時、体重は30Kgを切っており、実際、長年にわたって、就労に耐えられる体力を有していない状態が続いている。こうした状況も鑑み、親は、外に出て万引きをするリスクを避けるため、家の中で静かにしてくれさえすれば、もはやそれ以上は何も望まない、との態度を取っている。しかし、Bからすると、そうした生活をむなしい、と感じている。役割なり責任なりを持たされなくなり、自己価値の感覚に資するものを見出せないままの生活が続いている。

母は自分の摂食障害を心配して優しくしてくれるが、それ以外では全く心配してくれないので、もっと痩せたいと思っていたと認めている。両親から、自分が万引きを繰り返すので、ガンや心臓病を患うようになってしまったと言われているとする一方、親の育て方が変わってれば、友人もできて人生が変わっていたかもしれないとか、妹と比較しないでほしかったなどと口にする。親への両価感情が見て取れる。

Table 2に示したとおり、EPSIの生殖性の得点が低く、次の世代の世話をすることに関心を抱いたり、そのようなことにエネルギーを注いだりしていると自認していないことがわかる。親密性の得点も低く、孤独感を抱くことなく他者と付き合っているとの認識も乏しい。統合性の得点が低く、自分の人生を自らの責任として受け入れていく構えも有していない。さらに、アクセプトランス尺度からは、この現状を受け入れ難いととらえていることもうかがえる。

EPSIの信頼性の得点も低く、成人版信頼感の結果からは、他者信頼と不信が低い。しかし、自己信頼は、さほど低くない。思考スタイルとして、遮断の得点が高く、不都合なことは考えない傾向が見られるほか、楽観主義的態度も有している。加えて、EPSIの同一性の得点も低くない。これらをあわせて考えると、都合の悪いことは楽観的に捉えたり、あるいは、考えないようにしたりして、さらには自分以外を悪者にすることで、自我の傷つきを避けようとしている様子である。そこで、食の異常行動についても、事態が悪化の途を辿っている現実に目を向けずにいる。むしろ、その行動を取ると、周囲が自身に関心を向けてくれると受け止めて、その行動を武器として使い、自己効力感を自己確認しようとしている結果、執拗なまでにその行動にこだわっていると解釈できよう。

刑務所で、嘔吐できない環境下に置かれて少しずつ太っていったところ、体が楽になったと体験し、太ることに抵抗がなくなったと口にはしている。しかし、食の異常行動や万引き以外の社会

適応的な行動をすることで、周囲がBに関心を向け、Bの望んだような対人交流を展開できるとの実感を抱くようになるまでは、これらの異常行動が止まるのは難しいと予測される。

3-3 事例C：生活に行き詰まり窃盗に至った女性（56歳）

【事件の概要】 本件は、金ほしさからバックを窃取したものの。ホームレスになって10日目の事件である。10年以上住み込みで勤めた旅館が廃業になり、その後に見つけた住み込み就職先も、事業縮小で仕事を休んでほしいと言われ、生活状況が悪化の途をたどったようである。ホテル住まいをしながら、再度、求職活動をしたものの、適当な仕事を見つけられず、次第に投げやりな気持ちになっていき、飲みに行ったりパチンコをしたりする生活が始まり、貯金が底をついて、ホームレスになったとする。生活保護の申請などの公的支援は念頭に浮かばなかった様子である。逮捕に関して、大事件に至る前に捕まってよかった、と述べている。

前件は、20年近く前。単独で強盗をして、3年8月の刑に服している。夫が暴力団員であり、若衆や死去した組長の妻の面倒をみたりするには、何かと金がかかったとのことである。夫が娯婆にいたときは、それなりの稼ぎがあったものの、刑務所に入ってしまう、持ち金がどんどん減っていったとして、犯行に及んでいる。夫が社会に戻ったとき、「お前のおっかあ（本人）は何もできない」などと夫が揶揄されたくないと思って、暴力団員の妻として、金もないのに虚勢を張って、強くなきゃいけないみたいな部分があって起こした事件である、と振り返っている。

【語られたライフストーリー】 これまでの人生を6章に分けて説明している。第1章は幼稚園卒業まで、母方祖母と2人で生活し、祖母の職場の社員旅行にも連れていってもらったことに言及している。そして、この時代を人生における頂上経験とみなしている。

第2章は、小学校時代の内容。母が義父と一緒に、祖母と自分を迎えにきて転居したこと、途中まで義父のことを実父と思っていたが、小4のころ来訪した男性が実父であると知らされたことに触れている。それまでは、義父のことを普通と思っていたものの、振り返ってみるとあまり話をしていないと気づいたとし、さらに、自分は母の16歳の時にできた子どもで、祖母が両親を別れさせた、と祖母から聞いたこと、そして、それ以降、母たちが住むアパートの別の部屋で、祖母と2人で暮らすようになったこと、を取り上げている。そして、母と義父が自分たちを迎えに来たことを人生における底辺経験ととらえ、迎えさえすれば、祖母と2人で暮らせていたのに、と回顧している。

第3章は、小6時、遊んで帰ってきたところ、祖母が突然の心臓発作で逝去していたことを話題にしている。子ども時代の肯定的記憶として、祖母が亡くなるまで、祖母と2人で過ごしたことを挙げ、また、祖母が逝去して義父の家に同居せざるを得なくなったとして、人生の転機は、この祖母の他界であったと言及している。

第4章は、祖母の死後、義父の態度が横柄になり、「俺の子どもじゃないんだから、お前は勝

手にすればいい」などと言われたこと、それを母に伝えると、母が板挟みになってしまって辛そうに見て取れたこと、異父弟・妹の面倒を自分なりに見ていたつもりなのに、ある日、異父妹が怪我をした際、「ちゃんと見ていないからだ」と怒られ、このような家族に「気持ちがついていけなくなった」と、その心境を物語る。そして、出歩くようになり、結果、中学生の途中から、母に連れられて養護施設に入ることになる。その後、養護施設に在所していると目をつけてきた先輩の影響で、生活態度が不良になっていき、教護院⁽⁷⁾に移され、17歳過ぎまで教護院で生活したと説明する。1つ目の教護院では、言うことを聞かないと、お風呂に入ると滲みて大変なほどお仕置きをされ、それが嫌で逃げようとしては、またそのことで怒られるという繰り返して、途中から違った教護院に送られ、在所期間が長引いたととらえている。2つ目の教護院では、水泳の選手として頑張ったり、伝統芸能などを教えてもらえたりしたと肯定的な体験も挙げている。しかし、その一方で、教護院には悪ぶった人も多く、「強くないといけないんだ」と思うようになったし、成長するにつれて、母のことを「あ、こいつは母親よりやっぱ女なんだなあ」と思ったりもした、と振り返る。

子ども時代の否定的記憶として、上記の「我が子ではない」と義父に言われ、母が板ばさみになって福祉施設に連れて行かれたことを挙げている。一方、現時点で振り返ってみると、施設に入っていなければ、義理の家族にもっと悪いことをしていたかもしれないし、施設での共同生活を通じて、色々な相手に対する思いとかも身についたと付け加えている。

施設在所中、家から送金はあったものの面会はなく、退所時、一人では退所できないことから、初めて母が施設に来た、と語る。しかも、帰り際に、母が「家に帰ってどうするの、大丈夫かな」と言ってきて、ショックだったとその心情を吐露する。自分は家以外に行くところがないのに、母は、自分が家に帰って、家をぐちゃぐちゃにするのではとの不安を抱き、それに母自身が太刀打ちできるかという意味で、「大丈夫かな」と言っていたと分析する。「ばあちゃんいなくなると、これだから」と思いつつ、「2、3日いさせてよ、そしたら、私、出るから」と返したと言う。

一方、とりあえず家に帰ったところ、義父からは「よく頑張ったな」と声をかけられて、びっくりしたと振り返る。しかし、その言葉がどういう意味かを確かめることなく、「別に」と答え、「2日、3日経ったら、あたし、出るから」と返したことをよく覚えているとする。義父が「出てくのか？」って言うので、「だって、ここにいたらまずいでしょ、おっかさんも、間に入っただかいそうだし」と言って、「何かあった時にやっぱり迷惑をかけることになるし、いない方がいい。スムーズにお互い行くと思うんで」などと話したのが、義父との最後の会話であったと回顧する。「後から考えると、甘えればよかったのかなって思う部分もあるんですけど、やっぱりそれはできなかった」と付け加えている。

第5章では、実家を出たころから初婚生活について語っている。地元を離れ、教護院を先に出た人を頼り、その家に1泊させてもらった翌日、見つけた住み込み就職先は、ピンクサロン。年

年齢を偽って就職したが、そこに勤務するバーテンダーが未成年であると気づいて、配置転換をしてくれたことに触れ、その2つ年上のバーテンダーと2ヶ月くらい交際した後、入籍して、その両親とも良好な関係を持っていた様子を物語る。しかし、結婚して数年後、夫が不倫して離婚に至っている。不倫相手が子どもを産んだと聞いて、「私はいらんな、そんな中に入るのはいやだ、母親を見ているし」と、自分がいなければという感覚になったとしている。この初婚の相手には、体を張るような仕事をせずに済むようにしてくれて、今でも感謝していると口にする。ただし、そういうのをやって、金を稼いでいた方がよかったのかなって思うこともある、と付け足している。

第6章は、初婚相手と別れて地元に戻り、再婚して子どもを授かったことを取り上げている。働いていたスナックで、共通の知り合いがいて話が盛り上がった暴力団員が、後日、パトカーに追われているからと、自分の家に逃げ込んできて居候し、結婚することになったと説明する。その夫との間に2児を儲けたが、事件の概要の箇所で記したとおり、夫のみならず本人も受刑してしまい、やむなく子どもを養護施設に預ける結果になり、自分と同じ道を辿らせたしまったと後悔を滲ませる。しかし、現在、長男、次男共に逸脱せずに正業に就いており、長男には妻子もいると安堵の表情をのぞかせる。一方、本人の受刑中に、夫は刑務所を出所しているが、その後、新たな女性と交際が始まったようで、別れてほしいと連絡があったとして、それに即刻応じて、離婚が成立したと語る。

大人になってからの鮮明な記憶として、2番目の夫との間に子どもを授かり、その子が今、立派に、親の背中を見ず頑張っていること、を挙げている。また、人生における失敗や後悔として、この2番目の夫との結婚を挙げ、悪い相手ではなかったものの、暴力団員で、色々お金の面で問題があり、結婚しなければよかったとする。しかし、結婚しなければ子どもを授かることもできなかったし…と割り切れない感情を覗かせている。

このほか、人生におけるスピリチュアルな経験として、刑務所出所時の身柄引受人に出遭ったことを挙げている。その人には、最初の事件を起こして逃走中、たまたま飲み屋で知り合い、話が合ったというだけなのに、刑務所出所時の身柄引受人になってもらえ、出所後の就職の支援も含め、その後もずっと交流が続き、何かと相談に乗ってもらえた、としている。唯一、相談できる人と位置づけてもいる。本件時には、すでに他界していたが、本件のことを「甘えているようではあるが、その人に相談していたら…とったりもする」と述べている。

加えて、刑務所出所後、就労させてもらえた旅館についても、社長やお上さんにありがたいと思っているとして、その旅館に特別待遇で子ども達を宿泊させてもらえたことを懐かしそうに語っている。そして、これまでに最も挑戦したこと、賢く振る舞えたこととして、この旅館で10数年働いたことを挙げている。なお、旅館に勤めていたころは、子どもに連絡を取っていたが、その後は連絡を取っていない。金が底をついた際に子どもに支援を求めることを考えなかったの

かという問いに対して、自分が事件を犯して子どもを施設に入れた負い目があるから、それはできないと断言している。

自身の人生について、途中までは、「親が嫌い」「いていないようなもの」「なんで親は私を産んだ」「なぜ施設に行かせた」などと思っていたと認める。しかし、「さびしい部分も正直あるけど、後から考えると、仕方がないや」とも思う、と語っている。そして、旅館で就労するようになってからは、客の笑顔を見れて、ずっと仕事が続けばいいなと思っていた、と振り返る。

今後について、ちゃんとした仕事をして収入を得て、生活していくことが、子どもに見せることができる母親の姿であるにとらえて、そうしたしっかりした母親の姿を見せられるようになったら、子どもに会いたいと思っていると語る。そして、本件当時の状態については、物事から逃げ出してしまうこと、なんとかなるさという思いが、だらしない生活を招き、最終的には犯罪につながっていったとして、そのような甘い考えは捨てなければいけない、と自戒している。

【ライフストーリー以外で得られた本人情報及び本人の特徴】 Table 2に示したとおり、EPSIの自主性、勤勉性、同一性、親密性、生殖性は、一般女性の平均とさほど違ってない。上記ライフストーリーからも見て取れるように、たびたび不遇な出来事に出合っているものの、自主性を有しているため、自分なりに道を切り開こうとし、勤勉性を有していることから、努力を惜しむことなく取り組んでいる。親密性も備えているので、人との交流を避けるわけでもなく、また、生殖性も有しているので、子供をはじめ他者を慮ることもできているのであろう。

ストレス下に置かれても、他罰的に責任転嫁するわけではなく、肯定的解釈をしたりカタルシスや気晴らしを用いたりすることで、対処していると自認していることがTAC-24からうかがえるが、それは、ライフストーリーの語り口とも一致している。事態を回避しようとせず、計画立案して物事に取り組んでいこうとの構えも有している。ただし、情報収集の構えは欠いており、それが、例えば本件時、生活保護などを検討するまでに至らなかったことに通じるのであろう。

EPSIの自律性の得点は低く、また、思考スタイルも、認知的怠惰、すなわちあまりしっかり考えない傾向があると回答している。少なくとも、本件に至る前の生活の語りからは、その傾向が推察できる。

また、EPSIの信頼性の得点が低い、成人版信頼感では、不信の得点はさほど高くはない。したがって、初めから何も信じまいという構えで生活しているわけではなく、しかし、何かと失敗しては自分を信頼できないと感じたり、裏切られては他者を信頼できないと感じたりと、その時々に応じて受け止めていることがうかがえる。

このほか、EPSIの統合性の得点が低く、納得のいく人生ではないととらえている。ライフストーリーの内容からも見て取れるように、難題が次々と降ってきては、Cの思い描く人生行路は、変化を余儀なくされている。しかし、TAC-24の放棄諦めの得点が高く、思うようにならないことにこだわっても仕方がないとわりきり、その現実を受けとめようとしており、アクセプタンス

得点も平均並みで、こうした現実を受け止め、対処していこうとする姿が見て取れる。

4. まとめ

一般女性に比べて女性犯罪者は、EPSI の下位尺度のうち、信頼性や統合性の得点が低いことから、その内実がどのようなものであるかについて、3 事例を取り上げ検討した。

事例 A は、資質面の問題を抱えながらも家族に守られて中途まで生活できていたものの、家族がいなくなって以降、生活が立ち行かなくなり、その過程で犯罪に走っているものであった。犯罪に走ってしまった自分に、自身も傷ついている。親の生前にライフストーリーを語ってもらったならば、かなり違ったストーリー展開になったであろうと想像される。しかし、現状は、ただただ怯えるばかりで、自身も世の中も何も信頼できず、こんなはずではないと思いつつも、何から手をつけてよいかわからず、困惑してしまっている。そのような心象に基づいて語られたライフストーリーであった。

事例 B は、夫の DV をきっかけに摂食障害になり、食べ物を長年繰り返し窃盗するようになっていったものである。とはいえ、ライフストーリーの中心は、親の期待どおりに育たなかったとはいえ、もっと自分を大切に扱ってほしいとのこだわりである。摂食障害のことだけは母親が心配してくれると受け止めており、このことが、頑ななまでに摂食障害であり続けようとしている様子である。人生の頂上経験と位置づけている大学時代に、学び取得した栄養士の知識を、自身の食行動において悪用していると本人が言及しており、自身の持てる力を総動員して、母親の関心をつなぎ止めようとしているように見て取れる。そして、窃盗については、自ら主体的にするというよりは、してしまうとの心象であって、その対策に取り組むまでには至っていなかった。

事例 C は、義父実母の家族に安住できず、未成年時代、福祉施設で過ごし、若いころから自活を強いられている。そのような状況下、自身を受け入れてくれる相手の価値規範に見合った行動を自らも取ることで適応を図ろうとし、その過程で反社会集団と接触しては、自らも犯罪に手を染めている。しかし、真つ当な人生を歩みたいとの思いは有しており、我が子がそうであることに安堵している。本人自身、楽しく正業に就いていた経験も有している。しかし就労先を失って以降、思うように生活を軌道修正できない状況下、再度、犯罪に手を染めるに至っている。このような現状に陥った自身に対する厳しめの意味も含め、自分を信頼できないと自己評価しているようである。また、これまで展開された対人経験を基に、必ずしも他者を信用できるとは限らないとらえてもいる。しかし、自らに良くしてくれた人を思い起こすこともできている。いざという時に助けてもらえる人的資源を欠いており、危機場面では脆弱であるが、遵法社会に適応したいという志向を有している。就労を含め、生活基盤の安定化を図る支援が求められるケースである。

ライフストーリーで明るみになる個々人の心象を把握することが、当事者の意向に沿った支援

女性財産犯の人生の語りの分析

を提供する上での手がかりになると思われる。

注釈

- (1) 犯罪や非行をした人で、すぐには自立更生できない人に対して、一定期間、住居を提供し、円滑な社会復帰に向けての支援等を行う更生保護事業法に基づいて設立された法人。刑務所や少年院を出た後に利用する者が在所者の大半を占めている。
- (2) 中西・佐方 (2001) のほか、佐方・中西 (1987) や中西・佐方 (1987) には、EPSI の測定結果が掲載されている。しかし、測定時期が古いこと、調査協力者の年齢分布を統制していないものの、成人における発達課題の達成感には年齢の影響があることから、今回、新たに測定した。
- (3) 木下・山本・嶋田 (2008) では7件法で開発しているが、本調査では、他の調査項目と一緒に実施するため6件法で実施した。
- (4) 一般女性に対しては、生活全般の満足度を調べるために、Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) の人生満足度尺度の Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Morling (2008) の邦訳版も測定した。この人生満足度に対して、EPSI の各尺度、成人信頼感、セルフ・コントロール、アクセプタンス、TAC-24、の各尺度を投入し、重回帰分析 (ステップワイズ) を行ったところ、付録 Table のとおりとなった。人生満足度は EPSI の統合性と特に関連が強いことがうかがえる。加えて、EPSI の信頼性や同一性が高いほど、また、TAC-24 のうち、肯定的解釈をしたり情報収集したりする対処方略を有する者ほど、人生満足度が高いという結果が示されている。
- (5) Maruna (2001) が用いた McAdams のライフストーリー・インタビューは、2008年に新バージョンが出ているため、本研究では、この新バージョンを用いた。
- (6) 責任の緩和は、「自分のような境遇に置かれるならば、誰でも自分のように犯罪に手を染めてしまうだろうと、自分に言いかかっている」、遮断は「思い通りにいかないことに出会ったとき、それに対処しようとするよりも、そのこと自体を脇においやりがちである」、権力付与は「このような自分だから、法律を守らなくても大目に見てくれるはず、とどこかで思っている」、力志向は「自分の思いどおりに人にふるまってもらうため、おどしたり圧力をかけたりする」、感傷性は「犯罪はするけれども、一方で人に親切をするなど、それに見合うだけの穴埋めはしている」、超楽観主義は「まわりでよくないことが起きても、自分には起きないはずと考えがちである」、認知的怠惰は「地道に物事を取り組むよりも、何か楽な方法や近道はないかとさがしがちである」、継続性のなさは「一度やろうと決めても、なかなかやりとげるところまでいかない」で測定している。
- (7) 養護施設、教護院はそれぞれ、現在の児童養護施設、児童自立支援施設に相当する。

付録 Table 人生満足度に対する重回帰分析及び単相関の結果 (一般女性)

	<i>r</i>	標準化係数 β
EPSI		
信頼性	.595	.197
同一性	.570	.193
統合性	.639	.335
TAC-24		
肯定的解釈	.481	.106
情報収集	.348	.113
責任転嫁	-.047	.167
R^2		.524
修正 R^2		.518

*本研究は科研基盤 C15K04151 の助成に基づいて行われた。なお、本研究で取り上げた事例は、匿名を条件に事例の公開に承諾を得ている。

引用文献

- Agnew, R. (2005). *Why do criminals offend?: A general theory of crime and delinquency*. CA: Roxbury Publishing Company.
- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達: 家族および友人からのサポート感の影響 教育心理学研究, 45, 79-86.

- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- Epston, D., White, M., & Murray, K. (1992). A proposal for a re-authoring therapy: Rose's revisioning of her life and a commentary. In S. McNamee, & K. J. Gergen (Eds.), *Therapy as social construction* (pp.96-115). London: Sage Publications Ltd. (エプストン, D.・ホワイト, M. 第5章 書きかえ療法: 人生というストーリーの再著述 マクナミー, S.・ガーゲン, K. J. 野口祐二・野村直樹 (訳) (1997). ナラティブ・セラピー: 社会構成主義の実践 (pp.139-182) 金剛出版)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. International Universities Press. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性: アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- Gottfredson, M. R., & Hirschi, T. (1990). *A general theory of crime*. Stanford, CA: Stanford University Press. (ゴットフレッドソン, M. R.・ハーシー, T. 松本忠久 (訳) (1996). 犯罪の基礎理論 文憲堂)
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルと新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 木下奈緒子・山本哲也・嶋田洋徳 (2008). 日本語版 acceptance and action questionnaire II 作成の試み 日本健康心理学会第21回大会発表論文集46.
- Maruna, S. (2001). *Making good: How ex-convicts reform and rebuild their lives*, Washington, DC: American Psychological Association. (マルナ, S. 津富宏・河野莊子監訳 (2013). 犯罪からの離脱と「人生のやり直し」: 元犯罪者のナラティブから学ぶ 明石書店)
- McAdams, D. P. (2008). The life story interview, Revised, February, 2008.
<https://www.sesp.northwestern.edu/foley/instruments/interview/> 2013. 3 取得
- 中西信男・佐方哲彦 (1987). 成人期の同一性の発達に関する研究(2) 日本心理学会第51回大会発表論文集, 550.
- 中西信男・佐方哲彦 (2001). 第31章 EPSI 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック (第2版 pp.365-376) 西村書店
- 佐方哲彦・中西信男 (1987). 成人期の同一性の発達に関する研究(1) 日本心理学会第51回大会発表論文集, 549.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤文・薊理津子 (2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心: 公共場面における5つの行動基準との関連性 聖心女子大学論叢, 107, 57-77.
- 杉若弘子 (1995). 日常的なセルフ・コントロールの個人差評定に関する研究 心理学研究, 66, 169-175.
- Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial?: Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指標 (AQ) 日本語版の標準化: 高機能臨床群と健常成人による検討 心理学研究, 75, 78-84.
- Walters, G. D. (2013). *The psychological inventory of criminal thinking styles (PICTS) professional manual*.